

## △詩語▽の解析

# 意志

長野 隆

(ながの・たかし)

「意志」が或る意味をもった言葉として萩原の表現に現れるのは『月に吠える』刊行直後の「群集の中を求めて歩く」(大6・6)あたりからである。「群集はおほきな感情をもつたひとつの浪のやうなものだ」どこ

へでも流れてゆくひとつのさかんな意志と愛欲とのぐるうぶだ」という具合だが、こう書かれるとき、彼はボードレールの以上にもシヨール・ペンハウアー的であった。結びの「浪の行方は地平にけふる／ただひとつの悲しい方角をもとめるために」なども、いかにもそれらしい響きをもつ。シヨール・ペンハウアーによれば、「意志は、純粹にそれ自体として見れば、認識を欠いて、盲目的で、抑制不可能なる衝動にすぎない。(略)この意志の欲するもの、これこそこの世界にはかならないのであって、それはわれわれの前に現れ出ているがままの生命の世界そのものなのである。(略)意志が意欲しているものは、つねに生命であつて、生命とはまさしく表象に対するこの意欲の表現以外のなにもでもない」(「意志と表象としての世界」西尾幹二訳)のであるから、「意志」は万物具有の生命衝動や性衝動、究極的には死をも呑み込む生それ自体の在り方を意味しており、いかにも、『月に吠える』を書き了えたばかりのこの詩人の意向に適うべきものであつた。

因に、先の詩と併せて公表した四篇の詩にも、「地べたいちめに重なりあつて這ひまはるそれらの青いものの生命／それら青

いものさかんな生活」(「夢に見る空家の庭の秘密」)、「ああこの食欲／子供のやうな意地のきたない無恥の食欲」(「その手は菓子である」)、「ああ このひとつのまづしき心はなにもものいのちを求め／なにももの影をみつめて泣いてゐるのか」(「憂鬱なる花見」)、「さかんに強い力をもつてひろがりゆく生命のよるこびだ(略)ああ かくのごとき大いなる愛欲の寝台はどこにあるか」(「まぼろしの寝台」)等の表現が見られ、「意志」という言葉は使用されないものの、確かにそう解しいモチーフの類似性を指摘できる。してみるとこの「意志」は、すでに「意志」という一個の詩語の枠組を越えて『青猫』全詩篇、いや萩原の全詩業を包括する基幹のモチーフと言わねばならず、とりわけ『月に吠える』においては、それが詩語として意識されなかつた分だけ「意志」的であつたように見える。

「意志」が△身体▽と不可分な関係にあるのを考慮すれば、いかにも「意志」らしき衣装をまとつた『青猫』やそれ以後の詩篇の方に、むしろその感触が希薄だからだ。思うに、『青猫』は、『月に吠える』という「意志の事件」を詩想の核としながら、非可逆的にそれの塀の外をめぐり交う、マニエリスムに似ている。G・R・ホッケによると、マニエリスムは「永遠に女性的」である、「官能の多義性が知的な憂鬱に結びつく」性格があるらしく、なるほど、『青猫』の特徴を言い当てていないではない。

或いは、それと併行生産される夥しい教の散文詩やエッセイを見ても、かくいうマニエリスムのな自同律世界をみずから改變せんと焦慮する、萩原なりの思索と、「意志」への強い鼓舞が謳われている。「真理！ ああそれは微風の如く吹いてくる情感の声ではないか。我等の生活の浜辺にまで、海を渡つてくる熱風のやうに、情欲的な、情欲的な、精神への潮風ある刺戟ではないか」

つまり、「意志」はこのとき「新しき欲情」と名付けられた。要するに、ひとり詩語に限定せず、彼の「意志」の何たるかを問うならば、注がれるべき本来の視線は『月に吠える』という破格な「意志」の具現と、その陰で現実忍従を強いられた萩原の「意志」の悩みに向けられる。或いは、かくいう「意志」の實在に対峙して自ずと時間的・史的な対応を強いられた、詩想の行方にあるはずだ。例えば、晩年の萩原にこんな言葉がある。

かつて私は、精神のことを考へてゐた。夢みる一つの意志。モラルの体熱。考へる輩のをのぎ。無限への思索。エロスへの切ない祈禱。そして、ああそれが「精神」といふ名で呼ばれた、私の失はれた追憶だつた。かつて私は、肉体的ことを考へてゐた。物質と細胞とで組織され、食欲し、生殖し、不断にその解体を強ひるところの、無機物に対して抗争しながら、悲壮に悩んで生き長らへ、貝のやうに呼吸してゐる悲しい物を。肉体！ ああそれも私に遠く、過去の追憶にならうとしてゐる。私は老い、肉欲することの熱を無くした。墓と、石と、蟾蜍ヒキガエルとが、地下で私を待つてゐるのだ。

(「虚無の歌」昭11・5)

むろん、すべてが「意志」とそれへの追憶の記述だが、ここで「肉体」という言葉で括られた「意志」観に、萩原に固有な実感があつた。『月に吠える』内部で直に演じられ、直に展開を遂げた身体思想の片鱗だが、いわゆる「個体化の原理」をその極限において問うた、彼みずからの△孤独△の認識でもある。どこか吉本隆明の言う「原生的疎外」、フロイトの言う「エス」を想起させるような、本能的・根源的な自然の生命の「意志」——それが、例の錬金術的な志向回路を経て、萩原前半期の詩想を決定し

けたのは言うまでもない。「腐敗」や「再生」、「有限」や「無限」の觀念に脈絡して行く。或いは、より一般的なレベルでは、人工、都会、群集などに対する彼らしい「自然」観を言ふ土台ともなつた。「遣伝」と彼が呼んだものも、この「意志」に基づく。

しかし、萩原が生涯のなかで真に求め焦がれ、そして遂には追憶として未然のまま自身の「老い」の中に忍ばせざるを得なかつたのが、ここで「精神」という言葉で括られた「意志」の一切だ。生を肯定し、それをひるがえす、「生きんとする意志」——ときに「欲情」となり「方角」となつて、無限の「憧憬」を喚起させるもの——この「人間」にしかない「意志」の指針を信じて彼は未来を眺望したが、△檻の中の漂泊△に等しい生活にあつて、それが「憂鬱」と背中合わせになつたのは周知の通りだ。また、歳とともに宿命論的な「悔恨」の色調を帯び、生に対する「過失」感を募らせたのも事実だ。「絶望の逃走」や「絶望の復讐」なども、いわば逆説の断崖に立った「意志」の言葉にちがいない。

そして、「かくの如く、意志が一切を決定する。／宿命とは個々の生命の場合に準じて、意志の方向を指示するところの、現象学的の公式に過ぎない。(略)賭博や相場に失敗した人でさへが、ずつと本質的な原理を言へば、意志がそれを欲して、居り、わざと悪い目に賭けたのである」(「宿命論の根本原理」昭10・4)のようだ。「意志」が「宿命」に同義と化したとき、「輪廻」ならずとも、多分にニーチェ的「永遠回帰」に倣い、「意志」の行方を想いやつていたはずだ。むろんそのときはもう、「石もて蛇を殺すごとく／一つの輪廻を断絶して／意志なき寂寥を踏み切れかし。」(「漂泊者の歌」昭6・6)と、自虐する「意志」の悲嘆すら聴こえてこない。

——弘前大学助教 櫻井